

震災後の子どもたち(22)

震災から四年目のあれこれ

上崎 温子

灘区の山手にある、園児も震災前はよく遊びに行っていた丸山公園の復旧工事が完了したのが二月。お彼岸の今日、そこでボランティアの手で鎮魂の桜の植樹が行われたとテレビが報じていました。震災で亡くなった六千四百人の桜がこれからも公園から都賀川沿いに海岸まで植えられ、レクイエムプロムナードと呼ばれるそうです。

三月三日、所用で長田区三番町に在る保育園をお訪ねしました。全壊した建物は新しくなっていました。家具類は作り付けになったが、唯一つテレビが心配、次第に不用心になってきたと園長先生は仰っていました。当園でもテレビは固定されていないのですが、使い勝手のせいかもしれません。ひとしきり震災時の話になり、あの地震が日

中だったら——と言葉が続きませんでした。帰途、御蔵通り、菅原通りを新長田駅まで歩きました。更地のあちこちにプレハブやコンテナハウスが点在し、敷地一面の枯れたセイタカアワダチソウに気が滅入るばかりでした。

震災の年の九月、京都から学生時代の友人が、お見舞が遅くなつてと職場に来てくれました。顔をお合わすなり「神戸は未だ地震は現役なのね、喫茶店に入つても廻りは地震の話ばかりだった」と言いました。子ども達は未だ避難生活の状態でしたから、確かに現役です。四年たった今も、震災後、初めて会う人に限らず、しばしば地震の話が出て、時には胸がつまり、涙がにじむことがあります。或る初老の男性は、まるで条件反射のように——とつぶやきました。

二月二十日、神戸海洋博物館で「阪神・淡路大震災の教訓を世界と二十一世紀に発信する会Ⅳ」があり、今回は小中学生二十六名が「証言」をす

るといので出かけました。シンポジウムの終りに司会者の求めに応じて事務局の方が、小中学生をこの会によんだ経緯を説明したのですが、彼は、先日、ご家族を震災でなくした老人から、漸く外に出る気になったという電話を受けた——と言ったところで言葉が出なくなりました。静まり返った暫しの後、——こういうことになるので、人前で話したくなかった。平常で話せるのに五、六年はかかると思っていた、というようなことを言われました。

私は、何か安心しました。淡々とした日常生活が甦っている被災者も、震災について話をしますと、あの情景の中に——空も空気の色も音も、感情に蓋をした瞬間も含めて——すっぱりと掘めとられてしまうのです。私は、福井大震災にもあいましたが、あの頃、父母をはじめ大人達は、どんな思いをしていたのかと、阪神大震災からの生活の中で、度々思ったことでした。住居を失う、職

業を失う、家族を失うこと、そして独り仮設に住むお年寄りのことを一層考えてしまいます。多分、私も老いてきて、そのような立場に身を置くことが容易だからでしょう。

地震の起きた日の午前五時四十六分、今年も学園（養護施設信愛学園）では避難訓練を行いました。二つの児童棟、南館には⑤⑥ホーム、復旧した北館には①④ホームがあり、①ホームは三歳から五歳の幼児、他のホームは幼稚園児から高校生までの男女が共に生活しています。園長の放送を合図に常備された衣服一式と非常食を入れたリュックサック、ヘルメットを身につけ、中高生は①ホームの幼児の手をとり、兄や姉は弟妹と玄関に集合。園長と宿直職員三名が引率し、避難場所となつている御影北小学校まで歩きます。いつもなら賑やかな集団も、寝静まつている家々を思つてか、喋るのもひそひそです。防寒に着ぶく

れた幼児は、懐中電灯のあかりも覚束なく、よく転びそうになるのに、大きな子達は、はつとしてつなく手を加減しているのが伝わってきます。

避難場所から戻り、震災で亡くなった方々に黙祷を捧げました。あの日も活躍したドラム缶かまどに中学生が火を起こし、大鍋をかけ雑炊の準備。幼児の何人かは寒さで泣き出すほど冷えびえとした朝が明け始め、暖かな雑炊が待たれました。幼児には何故このような朝食をとるのか、いぶかしげな様子を見せる子もいましたが、小中学生はよく食べていました。後片付けも当番以外も加わり全員で要領よくやっていました。

子ども達が、震災のことを日々語らなくなって久しい。あの時間に起こされるのはまだしも、小学校まで行くことはないのという子どもの声、職員にも、同じような意見や、わざさわぎ思い出させるようなことをしなくてもという思いがないわけではない。しかし、当施設のような居住施設

では夜間に災害が起これば、少数の職員で対応せねばなりません。中高生はそうした時、小さな子達の中心で、重要な働きを任めています。

地震の起きた日も職員がいなかったホームでは、倒れた箆筒の下から子どもを助け出し、居間の中央に小さな子達を中にしてかばうように肩を寄せ合っていました。一番に他のホームの子達の安否の確認と、指令を未だ出さない園長は、下敷きになっているのではないかと心配して動いたのは中高生でした。日々の生活の中で、そうした事は自然と育っていますが、訓練は備えの一つだと思っ

ています。一月十七日午前五時四十六分に避難訓練をする何よりも理由は、子ども達に、震災で亡くなった友達や多くの人々のことを、自然の恐ろしさを、便利だった生活が一変してしまうことを忘れてほしくないからです。実際、訓練を始めるにあたっては、不満をもらしていても、いざ始めると真剣

にとりくんだのは、あの時のことを思い出し緊張があったからでしょう。

雑炊のお椀に掌を暖めながら、亡くなった、かつて寝食を共にしたM姉妹のこと、全員無事だったこと、何故、みんな助かったのだろうかと問うている声がありました。全員で後片付けに協力できたのも、たがいに心情を共有できたからでしょう。彼らの表情は清々しいものでした。

阪神・淡路大震災後、PTSDという言葉が人々の関心をひき、その対応が専門家によって今も続けられています。瞬時に眼前で肉親を失った子ども達の心の回復には、何年も何年もの時間が必要なのだと思います。震災半年後の夏、神戸、西宮を中心に兵庫県下の幾つかの児童養護施設の子どもの、震災による心身の状況を知るための調査がありました。PTSDの同じチェックリストを受けた施設以外の子ども達に比べて、施設で

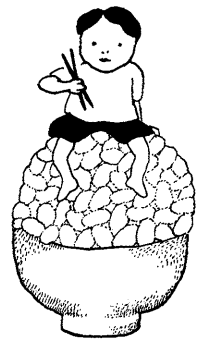
生活する子ども達は少しストレスが強い傾向があったとききました。夫々の施設で調査を担当した職員に共通した感想は、日頃、子ども達が夫々もっている不安や孤独感などの心の状態が震災によって増幅したということです。

ご存知のように居住施設に入所して来る時点でも子どもは親との別離という深手を負い、その上に新しい環境に適応してゆかねばなりません。家庭の外である社会が家庭となるのですから、馴れ親しんでいくため、どんなにか神経を使い、悲哀を抱えこんでしまうか、たまらない気持ちにさせられることがあります。生まれたときからの一貫した家族をもつ子どもに比べて、不安が大きかったり、過敏だとしても無理もないことでしょう。

それらが比較的強く表われた小学二年の悠介君は、避難生活の中で印象的でした。彼は二人の妹と同じホームで生活しており、柔和でやさしく、幼さが目立つ言動は、周囲を和ませますが、

一方劣等感をもたせるような子ども同士の関係も生じやすいところがあります。両親は、週末などに子ども達を迎えに来て、一泊二泊の帰省は多い方でした。

震災後二週間ばかりたった避難生活のところへ両親が迎えに来られました。彼は風邪で熱も高かったため、赤ちゃんもいる家庭に帰ることができず、妹二人は帰りました。それからの彼は、保母につきまとい、保母の姿が見えないと幼児のように泣きパジャマのまま捜しまわっていました。彼は両親から置き去りにされたと思ったのでしょう。普通の生活でならそうでもなかったのですよ。



うが、余震がありましたし、ホームではなく、大きな集団での避難生活は、気の弱い悠介君には困難で、不安な毎日だったのです。

私にも同じような経験があります。空襲のあと疎開先の村の分教場に転校することになり、母が手続きをすませ学校を出ました。私は、たった一つの教室の窓から身をのり出し、谷川に沿って下りていく母の姿に向かって泣き叫んだのでした。幼稚園も入学した小学校も校区外生で、ひとりには馴れていた筈でしたのに。私は自尊心を傷つけられたようで恥ずかしさがあり思い出さないようにして来ましたが、学園の子どもは私にそのことをちらちらと思い出させました。

阪神大震災は、より鮮明に、生命を左右した災害にあった子ども達の不安を教えてくださいました。悠介君も私も置き去りにされることの恐怖が根底にあったと思います。彼は今、小学五年生、随分おとなびて来ました。地震速報の信号を耳にする

と、テレビを振り返り、日本地図で場所を確かめています。

貞子ちゃんは小学四年生でした。○歳のとき、お姉さんと一緒に入所しました。彼女は御飯をなかなか食わず、たまたま私がやりますと、よく食べたのです。それ以来、乳児院に行きますと、彼女は急いで這って来て私の膝の上ののりました。相性がよかったですでしょう。一歳過ぎ家庭復帰したのですが、再び入所、私のことはすっかり忘れていました。父親宅への帰省、外出も多く、父親と姉妹でローランサン展を見に行ったこともありです。

父親のアパートは全壊し、帰省できなくなりました。北館の取り壊された更地の片隅で、背を丸めてひとり砂遊びする姿をよく見かけました。夏休みも帰省できませんでした。彼女はひとりぼっちになったような気がし、地震をとててもこわがっていました。父親が仮設住宅に入れて、面会に来

られるようになって、漸く明るさを取り戻しました。

静かでおとなしい彼女は去年の秋、兵庫県の中
学二年生全員が社会参加したトライアル・ウィー
クで保育所を選びました。毎日、子どもたちと遊
んで帰園すると、ぐったりしていましたが、彼女
らしい選択だったと思います。

子どもは博愛だけでは育たず、度々会えなくて
も親が心の中心にあり、親に会えない子どもは、
今、季節里親さんがしっかりと支えてくれていま
す。施設で働く者は、無力感をもつことがあります
すが、子どもが悲しいとき、つらいときに、より
添い、幸せであるための黒子であってよいのだと
思います。

昨日、神戸市内の仮設住宅のあちこちでお別れ
会がありました。仮設住宅はこの三月いっぱい
で解消されるそうです。神戸にあっても震災への思

いは様々です。他の地では四年前の事は過去のこ
と、災害というのはそうしたものだと思います。

しかし神戸では震災はそうであってはいけな
いと思っています。「幼児の教育」が今も眼にとめて
下さっていることに、温かさを感じると同時に、
私は緊張もしています。(児童名は仮名)

(社会福祉法人信愛学園)